

# 公式訪問先記録

2023年2月20日

10時45分～11時45分 ラオス教育スポーツ省

報告者：藤原 嵩太、中原 大海

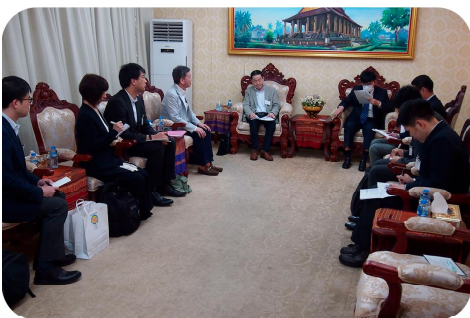
ビエンチャン市内にある教育スポーツ省の庁舎において教育スポーツ省大臣との会談を行った。まず、鈴木団長より、お礼の挨拶を述べた後、新型コロナウイルスの影響でCSAが行っている活動の柱の一本である衣料支援に多大な影響がでており、新しい支援形態を模索中であるが、大臣からも今後の支援の在り方について率直な意見を伺いたい旨を伝えた。

大臣からは、ラオス訪問および今までのCSAの支援活動に対する謝辞があり、COVID-19により経済的に大打撃を受けた影響で子どもたちの教育への取り組みに手が回っていなかった事実を挙げ、今後は教育方面で行政の取り組みに注力していきたい、特に地方の小学校に行けない子どもたちへの支援が重要と考えているとのことだった。実際に大臣が地方の村へ訪問した時に、電気、水道、電話もない地域があり、修繕すべき学校も多くあることが分かった。これを受け鈴木団長が、CSA25番目の学校としてナラオ村小学校に新しい校舎を建設している旨を伝えると、大臣が「2023年5月の引き渡し式には出席したい。」と嬉しい発言があった。

続いて、山崎事務局長よりCSAの活動について、主動力は労働組合の活動で40年以上の実績があり、主な目的はアジアからの貧困撲滅であると概略を述べ、その後に活動の三本柱 ①救援物資活動（長年にわたり中古衣類を輸送していたがコロナ時のコンテナ費の高騰などからしばらく見送り。代替として不織布マスクを贈呈）②小学校の建設と補修（今までに24校の建設が完了し、現在1校を建設中）③サンティパープ高校の教育支援（寮の運営費および教育物品の支援。前日の卒業生との交流も報告）を簡潔に説明した。加えて、2022年度の支援金の一覧を示し、活動を引き続き行っていくことを伝えた。

最後に大臣が「教育面でもっと発展できるように力を入れたい。そして、活動に参画する各団体へ私の感謝の気持ちを伝えてもらいたい、この支援に応えられるよう我々も励んでいく、ぜひまた本省に寄って欲しい」と述べられ、感謝の気持ちとして記念の楯が団に贈られた。

以上



**2023年2月20日**

**15時30分～16時30分 在ラオス日本大使館**

**報告者： 藤原 嵩太、中原 大海**

在ラオス日本大使館を訪問し中野公使と菊池三等書記官の応対を受けた。鈴木団長から受け入れのお礼と午前中にラオス教育スポーツ大臣と歓談したことを報告したのち、中野公使よりCSAの活動に対する感謝の言葉を受けた。公使は、現在のラオスの教育の問題点-教育予算措置不足、教師の待遇改善の必要性や教師のスキル低下-について触れられた。

続いて、山崎事務局長よりCSA活動の概略説明を行い、菊池三等書記官よりラオス情勢について丁寧な説明があった。ラオスは5か国と国境を接する内陸国で、人口約734万人（50近い民族で構成）と増加しており、首都ビエンチャンに約97万人が暮らしている。政治体制はラオス人民革命党による一党指導体制で、5年毎に選挙、党大会が開催される。経済・外交面では全方位外交を基本方針とし、鉄道や高速道路も開通し近隣諸国との結びつきも強い。名目GDP成長率も回復傾向にある（21年度2.5%）。中でも、中国が第一の投資国となっており、直接投資57.8%を占める。日本とラオスの外交関係は15年に戦略的パートナーシップを結んでおり、21年には日ラオス首脳電話会談を実施し、日・ラオス行動計画を発表していることから伝統的に親日国家であることがうかがえる。

教育については、小学校に入る前に幼稚園内に就学準備学級があることが特徴の一つであり、6歳から小学校（5年間）に入り、中学校（4年間）、高等学校（3年間）と続く。就学率や識字率、地方・男女間の格差等についてわかりやすく数値的データ、グラフを用いて説明された。課題としては下記5点挙げられた。

- ①教員能力の不足：教員養成校以降の研修が十分でなく、アップデートされない。
- ②都市⇄地方間格差：地方部へ教員が行きたがらないため、配置不均衡になっている。
- ③少数民族言語の壁：少数民族言語を理解する教員が極端に少ない。
- ④複式学級の存在：地方に多く、生徒の理解度に影響を与えている。
- ⑤教育分野への国家予算不足：途上国では予算の18%が目安だが、14%程度にとどまる。

地方部では学校が遠いから、寮費がかかるという理由で学校にいけない子がいる実状があることから、サンディパープ高校寮の運営支援の重要性を改めて痛感した。また、地方部との格差、言語の壁、就学前教育の重要性と実情など、日本では考えにくい部分を見聞きすることができ非常に参考になった。

以上



2023年2月21日

10時30分～12時00分 ナラオ村小学校

報告者：小武方 陽子、藁科 将彰

ビエンチャンのホテルから車で出発し約40分、途中新しく建設された高速道路を使用してナラオ村小学校に到着した。ここはシンフォニアテクノロジー労働組合が主体となり建設した25番目校である。ワーキング・スタディ・ツアー出発時は25番目の新設校との情報であったが、正確にはナラオ村小学校からの要請により、老朽化した校舎の隣に新校舎を建設したものであり、工事進捗は約90%であった。



小学校到着後、先生方と大勢の生徒より歓迎を受けた後、校長先生との打ち合わせを実施した。

最初に鈴木団長より今回の訪問の経緯および挨拶の後、新校舎建設の主体であるシンフォニアテクノロジー労働組合の藤原さんより、労働組合結成70周年の記念事業として今回の新校舎建設を決めたことを説明、最後に連合を代表して森副団長よりCSAの活動支援を続ける意義について話がありました。

校長先生からは、老朽化の激しい現校舎に代わり新校舎建設へのお礼の言葉と、日々工事が進んでいく中で、生徒とともに嬉しく思うとの感謝の言葉をいただきました。



打ち合わせの後、旧校舎の外観および建設中の新校舎の視察を行いました。旧校舎はドアもなく、壁も穴が開いている箇所も多くて老朽化が激しく、モンスーンシーズンには校舎が崩壊する可能性があるとの校長先生の言葉が信ぴょう性をもって迫ってきました。

建設中の新校舎は90%程度完成しており、電気系統の配線工事+αを残すのみとなっていました。新校舎は基礎からしっかりと建設されておりモンスーンにもびくともしないような作りで安心しました。

校舎視察後は訪問団が2名ずつ4つの教室に分かれて、お土産で持ってきた折り紙を使って紙飛行機を折りました。色とりどりの折り紙を生徒に配ると瞳を輝かせ「コブチャイライライ（ありがとう）」と皆声をかけてくれました。ラオス語が話せない訪問団ではありましたが身振り手振り日本語を駆使して一緒に紙飛行機を折ることができ、その後、全員で校庭で飛ばしました。邪気のないキラキラした瞳で我々の訪問を歓迎してくれた子供たちに心が洗われる一方、老朽化した校舎すら建て替えることのできない、教育を受ける権利すら満足させることができないアジア最貧国であるラオスという国について考えさせられる瞬間でした。



みんなで紙飛行機を飛ばした後は、校長先生をはじめ先生方が歓迎の昼食会を開いてくださいました。スチームライス、鶏の水煮、ヘチマのスープなどで楽しく歓談をしたのち、ナラオ村小学校を後にしました。

以上

**2023年2月21日**

13時00分～13時45分 AAR Japan Laos事務所

報告者：小武方 陽子、藁科 将彰

ナラオ村小学校訪問後、ビエンチャン市内に戻りAAR Japan Laos事務所を訪問しました。中に入ると日本茶と日本の老舗菓子ブランド「六花亭」のチャリティーチョコレートをご準備頂きプログラムコーディネーターの中井さんより活動内容を共有頂きました。

AAR Japanは1979年、インドシナ難民の支援を目的に創立され、これまでに65を超える国や地域で活動されています。現在は16カ国で、人道危機にさらされた人々に必要なものを迅速に届けて命をつなぐ緊急支援と、さらに未来を切り開くための長期的な支援を6つの分野で行い、2011年の東日本大震災等国内外で活動している国際NGOです。

今現在はウクライナ緊急支援やパキスタン洪水緊急支援、トルコ巨大地震緊急支援なども行っているそうです。

ラオスにおいては社会サービス、貧困、障害者に対して偏見や差別などが深刻な状況であることから、特に障害者の家族への理解を深めるための啓発、政府への働きかけ、収入を得るために研修等を行いインクルーシブな地域作りを目指すよう活動しているそうです。

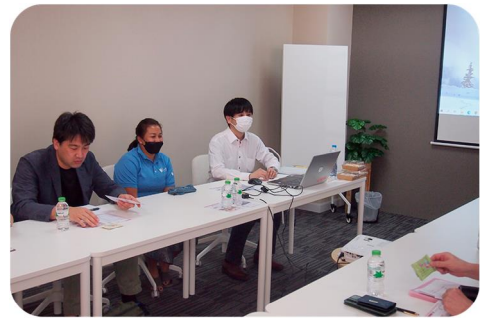
AAR Japanからラオスへの支援品として考えられるものとして

- ① 制服（地方では10%～20%の児童が制服を買えない）
- ② 教科書（貸与制度だが地方部では足りず1冊を複数児童で共有している状態）
- ③ 文房具（ペンやノートをギフトBOXで送ると喜ばれる）
- ④ 教育用具（サッカーボール）
- ⑤ 昼食（昼は帰宅して取るのが一般的、しかし地方は遠方から通学のため帰れない）
- ⑥ 石鹼（衛生面・感染予防の点で重要。なぜならば素手でもち米〈カオニャオ〉を食べる為）

等があげられました。

今後の支援物資品に関わり参考になるお話を頂きました。

次の移動先であるルアンパバンへの新幹線の時間の関係上、短時間の訪問となりましたが、ラオスへの支援の在り方について貴重な意見交換ができ、今後のCSAの活動の参考となる貴重な訪問となりました。



以上

**2023年2月22日**

**9時30分～12時00分 サンティパープ高校CSA寮**

**報告者：末 晶利、雪丸 貴宏**

車でサンティパープ高校に到着すると、寮生および先生たちが出迎えてくれ、熱烈な歓迎を受けた。歓迎セレモニーでは初めに校長先生から歓迎の挨拶があり、寮生90名のうち男性77名、女性13名であること、学生たちは日々懸命に勉強しており、中にはラオス国内で優秀な成績を出した生徒もいること、また、勉強だけでなくスポーツや踊りなどの部活動にも取り組んでいること等の現状報告に加え、寮生たちが今現在勉強できるのはCSAの支援があってこそとの感謝の言葉をいただいた。



続いて、鈴木団長が代表して挨拶を行い、歓迎して下さったことへの感謝を伝えるとともに、学生たちが一生懸命勉強し、優秀な成績をおさめていることを嬉しく思うこと、またCSAは継続して支援を行っていくこと等を伝えた後、日本から持参した「数学の教科書」および「スポーツ用品」の贈呈を行った。

また、今回コーディネーターを務めていただいた第1回卒寮生であるヌーソン氏より、寮生たちに激励のメッセージを送った。通訳がなかったため、伝えている内容そのものは分からなかったが、寮生たちの心に響く、大変熱いメッセージであることがひしひしと伝わるものであった。

続けて、村の長老と先生、生徒たちより健康と繁栄を祈る「バーシーセレモニー」を行っていただき、寮生代表からの挨拶・歓迎の踊りの披露ののちセレモニーは終了した。

セレモニー終了後、場所を移し校長先生をはじめとした先生たちと情報交換を行った。現在の契約内容の再確認や今後の支援に向けての内容等、様々な情報交換を行った。

最後に、寮生たちが生活する寮を実際に訪問。大変過密なスケジュールで毎日過ごしていることや、実際の部屋での生活状況等を確認し、サンティパープ高校CSA寮の視察は終了した。



以上

**2023年2月23日**

**9時00分～10時00分 ルアンパバン県教育省**

**報告者：小武方 陽子、藁科 将彰**

ルアンパバン県教育省長官を表敬訪問しました。最初に鈴木団長よりCSA訪問団の受け入れに感謝を伝えた後、各自自己紹介しました。

その後、教育長よりCSAの活動に対する感謝のお言葉をいただきました。教育長はサントィパープ高校生寮ができる以前からルアンパバン県の教育のお仕事をされておりCSAの支援事業についてとてもよく理解されていることが実感できました。

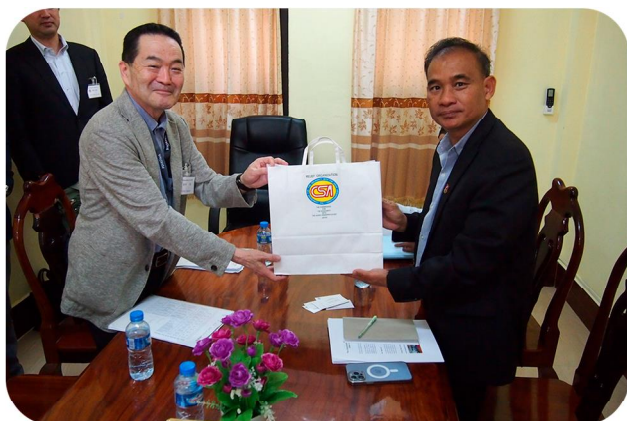
また、コロナ禍の前後で高校生寮の生徒や先生たちにも変化があり、コロナ前よりも弱くなった部分があることを非常に懸念されていました。ラオスでは昨年5月よりコロナ禍対策が終了しており、現在では元に戻りつつあるがまだまだ問題が解決していないとのことでありました。特に、ラオスの先生たちは給料が安いため副業をしていることが多く、コロナ禍で自身の生活を優先せざるを得ない状況や教育をする側の質の問題が明らかになったこと、生徒間、生徒・先生間の交流が弱くなったことなどを非常に憂慮されていました。

一例として、教科書が新しくなってもそれを教える事が出来ない若手の教師が増え、それを各校長が弱みとして把握できていない。自身の学校の強み弱みをそもそも校長自身が把握できていない、更には副校長と仕事内容が異なるため教師間同士でも意思の疎通ができていないようでした。

上記のような問題があるにしてもサントィパープ高校生寮の卒業生たちは非常に優秀で国内外の重要な仕事についているものも多いため、今後も継続したCSAの支援に期待しているとおっしゃっていただきました。

最後に、CSAからサントィパープ高校生寮への支援方法について教育長より提案があり、現在のCSAからサントィパープ高校生寮へ直接送金する方法ではなく、他の支援団体と同様にルアンパバン県教育省へ送金し、教育省からサントィパープ高校生寮へ送金する流れに変更してほしいとの要請がありました。CSAとして持ち帰り検討すると回答しました。

以上



**2023年2月24日**

10時00分～11時00分 在タイ日本大使館

報告者：末 晶利、雪丸 貴宏

冒頭、鈴木団長より、2020年以来のタイ・ラオス訪問であることを伝えたのち、森副団長より訪問団を代表して挨拶を行い、訪問を受け入れていただいたお礼に加え、訪問の目的である、これまで行ってきた救援衣類を送る運動（中古衣料カンパ）が実施できない中で、本日の訪問で得たことを今後の活動の参考とさせていただきたい旨を伝えた。

次に、大場次席公使より歓迎の挨拶があり、CSAの長年の支援活動に対する感謝の言葉に加えバンコクと地方の経済格差の問題やタイは様々な地域と国境を接していることから、難民や移民問題も抱えており、特に国内事情からミャンマーからの移民が増えていること等タイの現状について説明を受けた。

その後、千葉一等書記官および高木二等書記官より、バンコクと地方との格差が大きい実態や、就業構造の問題（インフォーマルワーカーの存在）、所得格差（世界の中でもトップレベルであり上位1%が資産の半分以上を握ること）、一般家庭における借金問題（借金して暮らす世帯割合が大きい）等の詳細な経済状況の説明を受けると共に、日本政府がNGOと連携して実施している草の根支援の取り組みについて説明を受けた。

中古衣料カンパについてはニーズが弱まっている実態もあり、教育分野については様々なニーズがあるのではないかという話もいただいた。

書記官からの説明を受けて質疑応答を行った後、鈴木団長より、CSAとして新たな支援の形を検討しており、そのため引き続き情報交換をお願いしたい旨伝え、在タイ日本大使館訪問は終了した。

以上



**2023年2月24日**

**11時30分～12時15分 国際労働財団JILAF（バンコク事務所）**

**報告者：末 晶利、雪丸 貴宏**

始めに、森副団長がCSAを代表し挨拶を行った後、JIRAFバンコク事務所の関口氏よりJILAFの活動について説明をいただいた。

JIRAFバンコク事務所は、タイを拠点に、タイ、ネパール、バングラディッシュ、ラオス、カンボジア、ベトナム、スリランカで活動をしていることから、現在中止している中古衣料カンパに代わる新たな事業の検討について意見交換を行った。

関口氏からは、新たな支援を検討する上で、タイのスラム街の状況、格差問題や移民問題、ベトナムの労働団体の状況、カンボジアの国内状況や労働組合の状況等、各国現状について説明を受けた。また、現在CSAのパイプのあるラオス国内での教育分野以外での支援の検討等、様々な視点から話しをいただき、その後質疑応答等を行い、今後の活動の検討に向けたヒントを得る貴重な意見交換となった。

最後に、JILAF本部では、ビジネスと人権をテーマに、インフォーマルワーカーの生活改善に向けて取り組みを進めていくとのことから、今後も連携をしていくことを確認し意見交換は終了した。

以上

